

特集：教室・学習者・教師を問い直す

特集「教室・学習者・教師を問い直す」について

本特集は、2015年3月21日に開催された言語文化教育研究会第1回年次大会のシンポジウムと同一テーマ「教室・学習者・教師を問い直す」で企画されました。シンポジウムの企画趣旨および議論の詳細は、特集の【発題】として広瀬論文に記載されています。本特集には、この【発題】に続き、シンポジウムのパネリストによる【論考】2本（牛窪論文、三代論文）と、【論考】へのコメント論文として【討論】1本（南浦論文）を掲載しています。

広瀬論文では、日本語教育において転換期とされる90年代以降、教育実践者の意識がどのように変化したのかという観点からシンポジウムの議論を整理し、従来の学習観・能力観からの移行によって協働的学習環境をつくる教師の役割を考察しています。牛窪論文では、こうした教師の役割が「同僚性」をめぐる議論の中で展開されます。同僚教師との関係性が問われないまま「自己成長」が推奨される現状を批判し、互いを拘束する専門性意識から自身を逸脱させ、共通の展望をもち、共に仕事をしていく同志としての関係性を築く必要があると主張します。三代論文では、地方大学における「オープンキャンパス・プログラム」の協働実践を通して、教師の役割としての実践の共有が論じられています。大学教職員、留学生、地域住民が共にプログラムの運営に携わることで生まれるコミュニティでの学びとともに、実践の共有の意義が考察されています。

最後の【討論】は、本特集で新たな試みとして設けた論文カテゴリーです。年次大会シンポジウムでの議論を学会誌『言語文化教育研究』で発展させるため、シンポジウム参加者であった南浦涼介氏に【論考】へのコメント論文を依頼しました。南浦論文では、まず『言語文化教育研究』の過去の掲載論文の分析を通して、主に日本語教育の分野で行われてきたこれまでの議論の特徴が整理されます。次に、言語文化教育研究会が日本語教育のみならず多様な教育実践に開かれる場となるべきことが主張され、牛窪論文、三代論文がもつ、日本語教育を越えた言語文化教育研究の可能性を、市民性教育の観点から論じています。

本特集の論文は、シンポジウムでの議論を発端とし、執筆者同士が論文作成過程においても対話的なやりとりを継続することで完成しました。記念すべき第1回年次大会での議論が本特集での議論につながり、さらに読者のみなさまとの対話的議論に発展していくことを願っています。

(広瀬和佳子・特集担当)